

## 蕭統「文選序」札記

福井佳夫

本稿は、蕭統（おくりなの「昭明」より、昭明太子と称されることがおおい）の作とされる「文選序」をよんで、その気づきを札記ふうにとまとめたものである。

テキストは、近時に刊行された兪紹初氏のご労作『昭明太子集校注』（中州古籍出版社 二〇〇一）以下、『校注』と称する）中のものをもちいた。兪氏は、この書で「文選序」に注するにさいし、唐代の『文選』五臣注、民国の高歩瀛『文選李注義疏』（以下、『高疏』）の注という主要な二種の注釈をあつめ、そのうえでご自身の見解を、「補注」としてくわえておられる（李善は「文選序」には、注をほどこしていない）。くわえて『高疏』は、清代の阮元「学海堂弟子梁昭明太子文選序注」（以下、『弟子注』）もひいているので、けっきょく兪氏『校注』のテキストは、「文選序集注」と称すべき観を呈して、はなはだ有用なものになっている。今回、私が「文選序」

札記を作成するにさいしても、おおいに便宜と裨益とをこうむることができた。つつしんで感謝もうしあげる。

また札記にまとめるにさいしては、先行する以下の訳注も、つねに座右において参照した。それは、小尾郊一『文選一』（集英社）、岡村繁『文学芸術論集』（平凡社）、高橋忠彦『文選上』（学習研究社）、興膳宏・川合康三『鑑賞 中国の古典 文選』（角川書店）などにおさめられた日本語訳、および『昭明文選訳注第一冊』（吉林文史出版社）、『文選全訳一』（貴州人民出版社）、『新訳昭明文選（一）』（三民書局）、『昭明文選〇』（台湾古籍出版有限公司）などにおさめられた中国語訳である。それ以外に参照した注釈類は、本文中に書名をかかげて引用しておいた。これらの著者のかたがたにも、御礼もうしあげる。

## 第一段

この第一段は、文学が発生した由来と発展してきた経緯についてのべたものである。

○「式観元始、

「眇觀玄風、（○平 ●仄）」

太古のころをみわたし、原始の風俗をふりかえってみると、

この二句、五臣注は「式は用なり。眇は遠なり。觀てきは見なり。言うところは、用て太初を視、遠く玄風を見るなり」と注する。それをいかして、右のように訳してみた。

だが、この対偶、なかなか問題がおおい。それは、二句を構成する「式観」「元始」「眇觀」「玄風」の四語が、ともに用例にとばしいことだ。まず、両句の上部にくる「式観」「眇觀」は、ともにこれ以前に用例が皆無であ

る。もっとも「式觀」の「式」は、『詩經』邶風式微などにみえる助辭だし、「眇觀」の「眇」もありふれた副詞なので、じっさいは「觀」や「覲」に重点をおいて訳せばよく、意味をとるには、それほど問題はない。

いっぽう、両句の下部にくる「元始」「玄風」のうち、「元始」のほうは、漢の平帝の年号（西暦一〇五）にも採用されたポピュラーな語である。ここではもちろん年号ではなく、太古（五臣注は「太初」といいかえる）の意でなければならぬ。だが、そうした意味での用例は、これ以前にみつからず、おそらくこの「文選序」の文が最初だろう（『漢語大詞典』でも、「元始」の項に「起始」の意をあげるが、その用例として、この「文選序」の文を第一に掲出している。ということは、これ以前に、太古の意での用例がみつからなかったのだろう）。

さらに問題なのが、「玄風」である。この語も「元始」と対応するからには、ほぼ同種の意だろうと推測がつく。じっさい、近時の『魏晋南北朝文学史参考資料』（五六四頁 中華書局）は、「文選序」のこの部分に「玄、遠。玄風、原始風俗」という解釈をほどこし、また張仁青『歷代駢文選』（一六七頁 台湾中華書局）になると、さらにわかりやすく「玄遠淳樸之風」と解している。たしかにこの語は、かく「原始の淳樸な風俗」の意で解すべきだし、またかく解せれば問題ないだろう。

だが、従前の用例を検するかぎり、こうした解釈をほどこすのは、じつは困難なのである。というのは、「玄風」の用例を吟味すると、この語は当時、「玄談の風氣」や「天子の徳化」などの意でつかわれており、原始の風俗の意では使用されていないからだ。たとえば、『文選』所収の沈約「宋書謝靈運伝論」に「在晋中興、玄風独扇」（晋が中興したころ、玄談の風氣が流行した、の意）とあるのは、「玄談の風氣」の意でつかったものだし、また庾亮「讓中書令表」に「弱冠濯纓、沐浴玄風」（五臣注に「天子の道の教えに沐浴す」と。弱冠の年に官につき、天子の教えに浴することができました、の意）とあるのは、「天子の徳化」の意での用例だろう。このよ

うに、蕭統が編纂したとされる『文選』中の用例が、そもそも「文選序」の使用法をうらぎっているのである。さらに現代の『漢語大詞典』でも、「玄風」の項に「原始の風俗」の意を掲載していないので、こうした意での用法は、古今をとおしても孤立したものであったと推測される。

かくみてくれば、「原始の風俗」の意での「玄風」は、かつて吉川幸次郎氏が卓論「六朝文学史研究への提議一則」（全集第二五卷）で指摘されたごとく、蕭統が従前なかった新意を充入したもの「であり、また後代その意で継続使用されなかったことば」だと理解すべきだろう。この「文選序」の文には、これ以外にも、この種の以前に用例のない新語や、用例はあっても新意が充入されたとおぼしき語が、ときどきみえている。

○「冬穴夏巢之時、世質民淳、斯文未作。」  
「茹毛飲血之世、

冬は穴居し夏は巢にすみ、鳥獸の「肉だけでなく」毛までくらしい血をすするなど、世相は質素で民草は淳朴であり、文学はまだ発生していなかった。

この四句、五臣注に「茹は蘊むなり。言うところは、上古は巢居穴処し、血肉を飲食し、毛羽に蘊藉するなり。時人は質樸にして、文章未だ作らず」とある。まず、はじめ二句は、『礼記』礼運の「昔者先王未有宮室。冬則居營窟、夏則居橧巢。未有火化、食草木之實鳥獸之肉、飲其血、茹其毛」（むかし先王のころは、まだすむべき家屋がなかった。そこで冬は「土でつくった」穴ぐらにすみ、夏は木枝でつくった巢のなかですごした。火を使用する術もしらなかつたので、草木の実や鳥獸の肉をそのまま食し、鳥獸の血をのみ、さらに「腹がふくれないときは」毛までくらった、の意）に由来する表現である。それゆえ二句目の「茹毛」は、「毛を茹う」の意でなければならず、五臣注のように「毛羽に蘊藉する」（毛羽のなかにくるまる、の意）と解するのは、不可だとせ

ねばならない（このことは、近藤光男「学海堂弟子梁昭明太子文選序注について」〈古田教授退官記念 中国文学語学論集 東方書店〉にくわしい）。

いっぽう、「冬穴」と「夏巢」は、礼運の「冬、則居宮窟」「夏、則居檜巢」の字句から、上端と下端の字をとって二字にした語である。こうした典故の翦裁のしかたは、清水凱夫『新文選学——文選の新研究』（二四九頁 研文出版）も指摘するが、なかなかこったやりかただといつてよい。さらに、四句目の「斯文」の語は、『論語』子罕の「天之未喪斯文也、匡人其如予何」（天が文明をほろぼさぬのなら、匡の連中がこの私をどうすることができようか、の意）にもとづいている。原典の『論語』では、文明一般を意味した「斯文」の語が、ここでは文学の意に限定してつかわれている。このことも、吉川氏が前出論文で注意を喚起されているが、やはりふるい革袋にあたらしい酒を充入した、「玄風」に類する語彙だといつてよからう。

○ 逮乎伏羲氏之王天下也、始画八卦、以代結繩之政。由是文籍生焉。  
「造書契、

伏羲氏が天下の王となるや、はじめて八卦をえがき文字をつくって、結繩による政治をあらためた。こうしたところから、書籍が発生してきたのである。

この五句に対して、五臣注は「太古は繩を結んで以て理む。逮は及なり。由は従なり。伏羲に及ぶや、八卦を画きて結繩に代う。是れに由りて書籍生ず」と解している。この部分、話柄としては『易経』繫辭伝の記事に依拠している。だが、じつは『高疏』が指摘するように、「伏羲氏之……文籍生焉」の文がそのまま、孔安国「尚書序」の冒頭にみえているのだ。この「尚書序」は『文選』にもおさめられているので、おそらく蕭統は、直接にはこれによったのだらう。また兪氏も指摘されるが、文字の発明者は、ふつう黄帝の史官だった倉頡だとされ

ることがおおい（許慎「説文解字叙」など）。ところがこの「文選序」では、その功を伏羲氏に帰している。これも、この「尚書序」の記述によったからだろう。

○易曰「觀乎天文、以察時變、文之時義遠矣哉。」  
「觀乎人文、以化成天下。」

『易』に「日月星辰をみて、四季の変化をよみとり、礼楽典籍をみて、天下をよき方向に感化してゆく」とあるが、時勢に適応した文学の効能たるや、じつに偉大なものではないか。

「觀乎天文」四句は『易経』繫辭下伝賁卦、「文之時義遠矣哉」句は同豫卦からの引用である。この部分、五臣注は「天文は日月星辰なり。時變は常を失うなり。人文は礼楽典籍なり。化成は下を化して理を成さしむるを謂うなり」という。この五臣注の見かたのうち、「時變」に対する「常を失うなり」という解釈は、『易経』の注釈を参照するとおそらく不可で、「四時の変化」の意に理解すべきだろう。また、つづく「文之時義遠矣哉」の句に対して、五臣注は「文の功を美するなり」という。こうした『易』の字句を引用して、文学の偉大な効用を強調するのは、この時期の文学史的記述の常套であり、めずらしいものではない。

ここまでは、文学が発生してきた由来を叙したものである。よく指摘されることだが、中国では、聖人が太古にあらわれて、理想的な太平の時代を現出したとすることがおおい。しかしこの「文選序」では、太古は未開の時代にすぎず、伏羲氏があらわれることにより、ようやく文字や書籍が発生してきたとのべている。こうした考えかたは、「太古は理想の時代だった」とする伝統的な尚古思想とは一致しない。政治体制や社会状況の方面では、「太古＝理想の時代」の強弁も、なお可能かもしれないが、文学の歴史を叙するばあいは、太古が文学不毛の時代であることは歴然としているので、「太古＝未開」の見かたをするのはやむをえなかったのだろう。この

あたり、蕭統が教条的な尚古の桎梏からまぬがれて、当時の常識的な見かたにしたがった結果だといってよい。この反尚古ふう考えかたは、以下で文学の進歩史観として展開されてゆく。

○若夫「椎輪為大輅之始、大輅寧有椎輪之質、何哉。」

「増水為積水所成、積水曾微増水之凜、

そもそも、「そまつな乗物の」椎輪は、「玉でかざった華麗な乗物の」大輅の先祖であるが、後代の大輅には、椎輪の質朴さはもはや残存していない。氷は、水があつま「り、こお」ってできたものだが、もともとなつた水には、氷の冷たさなどはなかった。それはどうしてだろうか。

ひきつづいて、文学が発展してきた経緯を叙してゆく。ここの「椎輪」云々の隔句対は、乗物と水の比喻をつかって、文学の進化を説明している。五臣注によると、「言うところは、玉輅ぎやくろは椎輪ついでりんに因りて生ず。増水は積水に由りて成る。然れども玉輅に質無く、積水に寒無し。〈何哉〉は、何故に斯かくの如くならんやと言へるなり。蓋し自ら疑問を設けて、以て後詞を発せしならん」という。さらに『弟子注』によると、「増水」は「層水」の意で、あつい氷の意のようだ。また「増水為積水所成」は、『荀子』勸学の「青取之於藍、而青於藍。氷水為之、而寒於水」（青は藍より抽出するが、それはもとの藍よりもあおい。氷は水が変化したものだが、もとの水よりつめたい、の意）や、『大戴礼記』勸学の「青取之於藍、而青於藍。水則為氷、而寒於水」を典拠にもつという。

この乗物と水のうち、現代の我われには、前者の乗物の比喻のほうが、

椎輪 ↓ 上代の世 ↓ 素朴である

大輅 ↓ 後代の世 ↓ 華麗である

の比擬がよくわかって、その寓意を了解しやすい。つまり蕭統は、乗物（椎輪↓大輅）と水（水↓氷）の変化を

比喩にもちいながら、文学は、上代（素朴）から後代（華麗）へ変化してきていると、主張しようとしているのだろう。この自問をうけて、つきは自答の部分がつづく。

○蓋「踵其事而増華、物既有之、隨時變改、難可詳悉。」

「変其本而加厲。」「文亦宜然。」

それはおそらく、つぎつぎと乗物をつくってゆくうちに、華麗さがましてく、また水のもとの性質がかわって、冷たさがましてきたからだろう。事物がかく変化してゆくならば、文学もそうであるにちがいない。ただ時勢に応じてかわってゆくので、変遷の迹をしりがたいのである。

五臣注は「言うところは時に因りて變改し、華厲を増加すれども、備さに知るべからず」という。妥当な解釈だろう。ここで蕭統は、乗物と水が変化することを、「華を増す」「厲を加う」と表現している。なかでも、前者の「華を増す」（華麗さをつよめてきた、の意）という表現からすると、ただの変化ではなく、よきほうへの変化、つまり進化だとかんがえているようだ。乗物が後代に華麗さをくわえてきたように、文学も時代がすすむにつれて進歩してきたと、蕭統は理解しているのだろう。この部分も、教条的な尚古のくびきから脱した蕭統の文学観を、よくしめしたものだといつてよい。

## 第二段

この第二段からは、「文学の進歩」のようすを、具体的に跡づけてゆく。そのさい蕭統は、文学の発展をトータルにかたってゆくのでなく、ジャンルごとに発展の経緯を追跡してゆくやりかたをとっている。『文選』本体



が賦ジャンルではじまるように、序文もはじめに賦ジャンルをとりあげる。

○嘗試論之曰、詩序云詩有六義焉。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。至於今之作者、異乎古昔。古詩之体、今則全取賦名。

では、とりあえずは文学の変遷を論じてみよう。「毛詩序」に「詩に六義がある。第一に風、第二に賦、第三に比、第四に興、第五に雅、第六に頌である」とあるが、いまの文人たちは、「賦に対して」かかる古代とはちがう見かたをしている。ふるくは『詩経』の叙法「のひとつ」だったが、現在においては、もっぱら賦のジャンル名として理解されているのである。

ここは、賦ジャンルの発生をのべている。まず「嘗」字について、五臣注は「暫」（しばらく、の意）だという。すると「嘗試論之」は、「とりあえず、ために文学の変遷を論じてみよう」ぐらいの意になる。これにつづいて蕭統は、「毛詩序」の詩の六義を叙した箇所をひいて、賦ジャンルと『詩経』との相関を提起する。これは、賦ジャンルの由来を『詩経』と関係づけて、賦の権威をたかめようとしたのだろう。だが、そうではあっても、じっさいは「いまの文人たちは、「賦に対して」かかる古代とはちがう見かたをして」いたようだ。この部分の五臣注によると、「今の述作者は、詩と賦は体を殊ことにし、古詩に同じからずとし、志に随したがいて名を立つる者なり」という状況だったという。このあたり、きつすいの伝統主義者だったら、『詩経』との相関をわすれるなど、まことになげかわしいなどと慨嘆しそうなものだが、蕭統は事実を淡々と叙するだけである。なお「全取」の「全」は、兪氏『校注』がいうように「純」（もっぱら）の意だろう。すると「今則全取賦名」句は、いまの文人は、六義の賦とは関係なしに、もっぱらジャンルの名称だと理解している、の意となる。

○「荀宋表之於前、自茲以降、源流寔繁。」

「賈馬繼之於末。」

荀況と宋玉がさきに「賦の作者として」出現し、賈誼と司馬相如がその後をひきついだ。これ以後、賦の流れはたいへん多様になった。

ここから、賦ジャンルの展開にうつる。この部分、五臣注は、一句目に「荀卿宋玉は文章の首と為る」、二句目に「賈誼司馬相如なり」、三・四句目に「荀宋已下の文章は、源流寔に繁し」と、無難ではあるが、あまり役にたため注をするだけだが、清代の『弟子注』は興味ぶかい指摘をしている。すなわち、はじめ二句に類似した表現として、沈約の『宋書』謝靈運伝論の「屈平宋玉導清流於前、賈誼相如振芳塵於後」（屈原と宋玉はさきに文学の清流をみちびき、賈誼と司馬相如はあとで芳塵をふるった、の意）をあげる。そして、沈約が屈原の名をあげているのに、「文選序」のほうは荀況（『荀子』賦篇に、「礼賦」「知賦」「雲賦」等がふくまれる）をあげて屈原をあげなかったのは、騷ジャンルにおいて屈原の名をあげているからだろうと、推測している。たしかに「文選序」では、蕭統は屈原を「騷」ジャンルの創始者と位置づけ、賦家とはみなしていないようだ。

○「述邑居則有憑虛亡是之作。」

「戒耽遊則有長楊羽獵之制。」

都邑のありさまを叙しては、憑虚（張衡「西京賦」）や亡是（司馬相如「上林賦」）の作がかかれ、狩獵の弊をいさめては、揚雄の「長楊賦」や「羽獵賦」の篇がうまれた。

漢代の賦の展開を叙した部分である。「憑虚」と「亡是」とは、賦中の登場人物の名をもって、作品名にかえて使用したもの。この部分、いっけん無難な叙述にみえるが、兪氏の『校注』は、この部分にするどい意見をの

べている。すなわち、上文で「自茲以降、源流寔繁」（これ以後、賦の流れはたいへん多様になった）とあり、それをうけて「述邑居則」云々とつづくからには、論理の流れからいって、ここには司馬相如よりあとの状況が叙されねばならない。ところが、ここに「亡是」（司馬相如「上林賦」）がふたたび提示されているのは、上文と矛盾するではないか。能文の蕭統が、こんなへまをするはずがない。おもうに、ここは「亡是」でなく、「安処」（張衡「東京賦」の登場人物）とあったのの誤写だろう。そうすれば上文との矛盾もないし、対偶としても、みごとに左右対称の内容となる——と。この兪氏の説、なかなかうがった見かたである。たしかに氏の指摘されるように、「亡是」を「安処」にあらためると、上句はともに張衡の賦で、都邑のありさまを叙し、下句はともに揚雄の賦で、狩獵の弊をいさめた記述となって、上下二句できれいな対偶となる。

○若其「紀一事」風雲草木之興、推而広之、不可勝載矣。

「詠一物、魚虫禽獸之流、

紀事や詠物の賦では、風雲や草木を叙したおもしろさがあり、また魚虫や禽獸を叙した作がかかれた。視野をひろげてゆくと、とうてい全部はのべつくせないほどだ。

この部分、五臣注は「紀事詠物は、其の流既に広く、ことごと尽くは此に載すべからず」という。「興」字については、「去声」つまり去声によめという音注があったので（胡刻本など）、興趣の意で訳した。また「紀事」や「詠物」について、『弟子注』は、たとえばこのような賦をいうと、具体的な作品例をあげているが、文学史的には常識的なことなので、ここではあげない。要するにここでは、都邑の描写や狩獵への諷諫以外の内容を叙した賦が、たくさんかかれたことをいっている。たしかに蕭統のいうように、当時は「とうてい全部はのべつくせないほど」かかれていたのだろう。賦ジャンルに対する記述はここまで。

○又楚人屈原、含忠履潔、君匪從流、深思遠慮、遂放湘南。

臣進逆耳、

また楚のひと屈原は、忠誠で潔癖な人がらだった。楚王は諫言に耳をかさなかったが、それでも屈原は耳にいたい忠言を呈したため、深遠な思慮をもちながらも、湘江の南方へ放逐されてしまった。

ここからは、騷ジャンルについてのべる。この部分は、『史記』屈原伝や『楚辞』の記述によりながら、屈原の生涯をスケッチしている。五臣注は「言うところは、屈原は節を乗りて忠は諒かに、思慮は深遠にして、屢しば逆耳を進む。時に君は諫めに従うこと流るる如きこと能わず、遂に湘水の南に放たるるに遭えり」と注している。字句の表現に注目した『高疏』によると、「君匪從流」は『左伝』昭公十二年の「從善如流」（善言にしたがうのが、流水のごとくはよい、の意。なお、成公八年にも「從善如流」の用例がある）、「逆耳」は『説苑』正諫の「良薬苦於口利於病、忠言逆於耳利於行」（良薬は口にながいが、病気にききめがある。忠言は耳にいたいが行爲に役だつ、の意）をふまえるという。すると、典拠によって「忠言」の意を有した「逆耳」の語は、『書経』君陳の「友于兄弟」を介して、「友于」で「兄弟」の意をあらわすような、断語とよばれる高度な典故利用をしたものと理解すべきだろう。

○耿介之意既傷、臨淵有懷沙之志、騷人之文、自茲而作。

「壹鬱之懷靡愬。」吟沢有憔悴之容。

至忠の心はふかくきずつき、くるしき思いもうったえるすべがない。彼は江淵にちかづいて石を懐にして身を投じんとし、沢辺で吟じては憔悴した姿でたたずんだ。「離騷」など騷の文学は、こうしてうまれたのである。

五臣注はこの部分を、「耿介は忠烈なり。壹鬱は憂思なり。靡は無なり。申愬する所無きを言う」「屈」原既に放逐せられ、石を懐いて將に自ら水に沈まんとす。故に懷沙賦を作り、以て志を見す。初め「屈」原は行ゆく沢畔に吟じ、顔色憔悴す」「屈」原は是に於いて離騷を著す」などと説明している。この部分、似たような記述が、『楚辞』離騷・懷沙・漁父などにみえるので、おそらく『楚辞』中の詩文を点綴して、つづりあげたものだろう。

ところで、ここで賦と騷の順序に注目してみよう。『文選』本体をみると、賦が冒頭にきて、ついで詩がならば、そのあとに騷ジャンルがならんでいる。だがこの「文選序」では、賦↓騷↓詩の順に叙されており、賦と騷とが連続している。つまり『文選』本体では、あいだに詩をはさむことによって、賦と騷とを完全にきりはなしているが、序文のほうは、賦と騷を連続させることで、両者の関連を示唆するかのようなのである。

こうした相違は、いっけん些細なことのようにみえる。だがこれは、賦と騷を同種の文章とみなすかどうかの問題ともかかわって、文学史的にはかなり重要なことなのだ。すなわち、蕭統当時でも、また後代でも、この賦と騷を同種の文とみなすか、べつのジャンルとみなすか、いろんな意見があった。蕭統は「文選序」で、賦と騷とを連続させて叙していたが、『高疏』の編者の高歩瀛氏は、この措置に対し、

『漢書』芸文志に、「屈原の賦二十五篇」とあるから、騷というのは、つまり賦のことだろう。昭明太子は『文選』で賦と騷の二つにわけたわけだが、その処置は、後人にひどく評判がわるかった。だがこの序文をみると、騷と賦とが実質は同ジャンルであることを、太子はしらないではなかったようだ。ただ太子当時は、騷と賦をわけてかんがえていたので、大勢にしたがったにすぎないのだろう。

と、好意的にかたっている。高氏が「騷と賦とが実質は同ジャンルであることを、太子はしらないではなかった

ようだ」と推測したのは、やはり「文選序」が『文選』本体とはちがって「賦と騷とを連続させて叙していたからだろう。

この高歩瀛氏の推測を後押しするものとして、私はこの騷ジャンルの記述が、「又楚人屈原……」と「又」字ではじまっていることに注目したい。「後出の」詩ジャンルの「詩者、蓋志之所之也……」や、頌ジャンルの「頌者、所以游揚徳業……」という文頭とくらべると、「又……」とはじまる句は、どうやらあらたに話題をおこすのではなく、前段との関連性をよりおおく示唆しているかのようだ。たとえば、序文中で後出する「又少則三字」（さらに、字数のすくないものでは三言詩、の意）や「又詔誥教令之流」（また詔・誥・教・令の仲間や、の意）などをみてみると、同種のものに追加して叙そうとするときに、「又」字を文頭においている。蕭統は、「又」字で騷ジャンルの記述を開始することによって、さりげなく賦と騷との連続性を暗示したのではないだろうか。

なお、高氏は「太子当時は、騷と賦をわけてかんがえていた」というが、その例として、劉勰をあげておこう。すなわち、蕭統より年長の劉勰は、彼の『文心雕龍』でわざわざ「弁騷」という篇をたてて、賦を論じた「詮賦」篇と区別しているのだ。かく当時は、騷と賦をわけてかんがえるのがふつうだったので、蕭統も『文選』の本体で「そうした大勢にしたがったのだろう。このあたり、自説をおしとおすのでなく、当時の大勢にしたがおうとする、蕭統の温和な姿勢を反映したものだといつてよい。

○詩者蓋志之所之也。情動於中而形於言。関雎麟趾、正始之道著。故風雅之道、粲然可觀。

桑間濮上、亡国之音表。

詩は、志の動きを叙したものだろう。ひとの感情が心中でうごき、それをことばに表現するのだ。『詩経』の「関雎」「麟趾」の詩には、王道の基礎をただす道すじがしるされ、「桑間」「濮上」の詩には、亡国の

音楽が表現されている。かくして詩の風雅の正道は、燦然とかがやいたのである。

さて、ここからは詩ジャンルについての記述がつづく。この部分は、『詩経』の詩についてのべたものなので、語句も経書を斟酌しながら、儒教的な文学観を提示している。『弟子注』によれば、ここの下じきになった典拠は、「毛詩序」の「詩志之所之也。在心為志、發言為詩。情動於中而形於言」（詩は志が発したものである。心中にあると志であるが、それを口にだすと詩となる。感情が心中で発動するや、口にだされるのだ、の意）、同「関雎麟趾之化、王者之風」（「関雎」「麟趾」の詩の教化たるや、王者の風を叙している、の意）、同「周南召南、正始之道、王化之基」（「周南」「召南」の詩は、王道の基礎をただす大道であり、王化の基盤でもある、の意）、『礼記』楽記の「桑間濮上之音、亡国之音也」（「桑間」「濮上」の音楽は、亡国の音楽である、の意）などという。こうした典拠によって、詩による「正始之道」や「風雅之道」の興隆が、強調されている。その意味で、この部分に関しては、伝統的な儒教的文学観にそのまましたがった記述だといってよからう。

○自炎漢中葉、厥塗漸異。退傅有在鄒之作、四言五言、区以別矣。

「降將著河梁之篇。」

前漢のなかごろ（武帝のころ）から、この詩の正道に変化が生じた。引退した傅の韋孟は、「在鄒」（四言）をつくり、降將となった李陵は、「河梁」（五言）をつくった。かくして四言詩と五言詩とが、道を異にするようになったのだ。

はじめ二句について、五臣注は「漢は火徳なり。故に炎と称す。武帝は十二帝の中に居れば、故に中葉と称す。文章漸く古に殊なるを言う」と注する。すると「炎漢中葉」とは、前漢の武帝の時期をさすことになる。その時期に、詩の正道に変化が生じてきたことになる。では、その変化とはなにか。

つぎの「退傳」二句に対し、やはり五臣注は「退傳は韋孟を謂う。「韋孟は」楚元王の孫の戊ほうに傳ふたり。四言詩を作りて王を諷するは、此より始まる。降將は李陵を謂う。匈奴に降る。蘇武は河梁ほとりの上にて「李陵と」別る。五言詩を作るは、此より始まる。是れ区分するなり」と注している。前者は、漢初の文・景帝のときのひとである韋孟が、楚元王の孫の戊を諷した四言詩である。為政者への「四言による」諷刺は、『詩経』の詩でもおこった。しかし韋孟「在鄒」の詩は、自然発生の民謡のたぐいでなく、士人による意図的な諷諫であり、じゅうらいなかつた傾向だといってよい。いっぽう、後者は武帝のときの武將、李陵がつくった五言詩である（偽作の可能性については、いまふれない）。五言の詩は従前なかつたものであり、このばあいには明確にあたらしい変化だといつてよからう。五臣注にしたがうと、かく新傾向の韋孟「在鄒」と李陵「河梁」がかかれ、かつ四言と五言とに分離したのが、「詩の正道に変化が生じた」ということだろう。

もっとも、こうした、四言詩の代表として韋孟の詩をあげ、五言詩の代表として李陵の詩をあげるのは、『文心雕龍』明詩篇や任昉『文章緣起』佚文（後述）でもみられることであり、おそらく当時の公論だったのだろう。この部分は、そうした公論を踏襲したうえで、とくに新傾向として四言詩と五言詩の分離を、指摘したものとおもわれる。なお「区以別矣」は、『論語』子張の「譬是草木、区以別矣」（草木にたとえれば、地面をわけて區別するようなものだ、の意）をふまえる。

○又「少則三字、各体互興、分鑣並驅。」  
「多則九言、

さらに、字数のすくないものでは三言詩、おおいものでは九言詩など、各様の詩体が発生して、性格をちがえつつ並行してつくられた。



五臣注は、この部分に「『文始』に△三字は夏侯湛に起こり、九言は高貴郷公より出づ」と注する。五臣注がいう『文始』は、任昉の『文章始』という書をさすというのが、『高疏』以来の定説である。その任昉『文章始』なる書は、どうやら『隋書』経籍志に「梁有文章始一卷、任昉撰」とあるものをさし、いま『文章縁起』と称して残存する書物が、それに該当するようだ。この『文章縁起』はすでにほろび、佚文が『学海類編』におさめられるだけだが（明の陳懋仁の注あり）、その書をひもとくと、たしかに「三言詩、晋散騎常侍夏侯湛所作」や「九言詩、魏高貴郷公所作」などの語句が現存している。かく五臣注の文言が、現存する『文章縁起』の佚文と類似する以上、高歩瀛氏が指摘するごとく、五臣の注は、この任昉の書にもとづいたとせねばならない。もしそうだとすれば、初唐の五臣注だけでなく蕭統も、任昉『文章縁起』の記述を参照しつつ、「文選序」のこの部分をつづった可能性がでてこよう（ただし、現存する『文章縁起』に関しては、真に任昉の手になるものかは疑問がおおい）。

以上で詩の記述をおわって、つぎは頌にうつる。いわば主要な詩賦を説明しおわって、その他のかるいジャンルにうつるわけだが、そのトップに頌をもってきたのは、やはり頌が六義のひとつだったからにちがいない。このように『詩経』、ひいては経書を重視する姿勢は、この「文選序」の基調和音と称すべきものといえよう。

○頌者所以「游揚徳業、吉甫有穆若之談、舒布為詩、既言如彼。」  
「褒讚成功。」「季子有至矣之歎。」「總成為頌、又亦若此。」

頌はひとの徳業を称揚し、その功業をたたえるジャンルである。かつて周の尹吉甫は「穆<sup>ほく</sup>たること清風の如し」と称された頌をつくり、また呉の季札は周の頌をきくや、「至れるかな」の嘆声をあげた。おなじ感動であっても、しきのべて詩にすれば、上述のようなものになるし、総合して頌につづれば、いま説明

しているようなものになろう。

はじめ二句は、五臣注によれば「其の徳業を揚げ、其の功の成るを讃むるなり」だという。つづく「吉甫」句と「季子」句には典拠があり、前者は『詩経』大雅烝民の「吉甫作誦、穆如清風」（尹吉甫が誦をつくったが、その誦は清風のように心をやわらげた、の意。この前句は、蕭統のみたテキストは「吉甫作頌」だったのだらう）をふまえ、後者は『左伝』襄公二十九年の「呉公子札来聘、……為之歌頌、曰至矣哉」（呉の公子の季札がやってきた。……そこで季札のために頌をうたわせると、季札は「すばらしい」といった、の意）をふまえる。これら尹吉甫と季札に関する話柄こそ、「ひとの徳業を称揚し、その功業をたたえる」頌の作例だというのだから。ただ現実には、尹吉甫の頌は現存していない。

つづく「舒布」云々の隔句対は、正確な意味がとりにくい。五臣注や近人の注釈を参照しても、所説に一長一短があつて、明確な解釈をきめがたい。「舒布」や「総成」「如彼」「若此」の語など、いずれもぼんやりした内容なので、ここでの意味を確定しがたいのである。ただ、対偶のなかで「為詩↓為頌」と詩と頌を対応させているので、蕭統は、両ジャンルを双生児のように理解しているようだ（ともに詩の六義にふくまれる）。右の訳では、これをふまえて、尹吉甫のことばや季札の嘆声は、おなじ感動であっても、これをしきのべて詩にすれば、上述のよう（「蓋し志の之く所なり」云々）になり、また総合して頌につづれば、いま説明しているよう（「其の徳業を揚げ」云々）になる——と意識ぐみに解しておいた。頌ジャンルへの解説はここまでである。

○次則 箴興於補闕、論則析理精微、美終則誅発、  
戒出於弼匡。銘則序事清潤。図像則讚興。

つづいて、箴は王の欠点をおぎなわんとしてうまれ、戒はひとをただそうとして出現した。論は道理を精

緻に分析し、銘は功績をかざって叙するもの。故人をたたえんとして誄がおこり、賢者の画像をえがこうとして「付属の画」讚が発生した。

ここからは、いわばその他おおぜいのジャンルを、まとめて説明している。詩賦や頌などにくらべると、かろいあつかいである。右の訳文は、五臣注の「箴と戒は」以て闕を補い正を輔くべし」「論は則ち分別すること精微なり。銘は則ち其の功の美を述べ、名を称うべからしむ」「誄は」功業有りて終わる者有れば、其の功を累ねて之を記す。「讚は」若し徳有る者あれば、後世其の形を图画し、文を為りて以て讚美す」などを参考にして訳してみた。ここの各ジャンルへの解説ふう文章は、いずれもこれ以前に似たような記述がある。すなわち戒を論じた「戒出於弼匡」句については、李充「翰林論」に「誠誥施于弼違」とあり、論を解説した「論則析理精微」句については、陸機「文賦」に「論精微而朗暢」とある。また銘の「銘則序事清潤」句については、「文賦」に「銘博約而温潤」とあり、また誄の「美終則誄發讚」句については、摯虞「文章流別論」に「嘉美終而誄集」とあり、また讚の「凶像則讚興」句については、李充「翰林論」に「容象凶而讚立」とある。蕭統はおそらく、こうした先人の発言を意識しながら、ここの記述をつづつたのだろう。このあたりも、蕭統の熱心な学習ぶりを示唆している。

○又「詔誥教令之流、書誓符檄之品、答客指事之制、篇辞引序、衆制鋒起、表奏牋記之列、弔祭悲哀之作、三言八字之文、碑碣誌状、源流間出。」

また詔・誥・教・令の仲間や、表・奏・牋・記の諸作、書・誓・符・檄の作品、弔・祭・悲・哀の文学、答客や指事の作や三言・八字の文、さらに篇・辞・引・序や碑・碣・誌・状など、おおくのジャンルがいつせいに出現し、文学の流れが発生したのだった。

ここもジャンルを列挙している。ただ右の文章のうち、どこできてジャンル名と認定すべきかは、なかなかむつかしい。右の訳では、いちおう「答客」「指事」「三言」「八字」の四つを、二字で一ジャンルだとみなし、それ以外は一字で一ジャンル名とみなしているが、とくに根拠があつたのではない。

ところで、これらのジャンルのいくつかは、具体的にどんな文章をさすのか、諸説が紛々として、現在でも確定できないでいる。なかでも、「答客」と「指事」の実体をめぐっては、じゅうらい意見がわかれている。ふるく五臣注は、「答客」とは東方朔「答客難」のことをさし、「指事」とは揚雄「解嘲」の類のことであるとす。ところが『弟子注』（章釗）では、「指事」は枚乘「七発」のごとき七のジャンルをさすとし、さらに高氏『高疏』や郭紹虞『中国歴代文論文選』（二一九三頁 中華書局）も、章釗の意見に賛成して、「指事」七ジャンル「説」にみしている。いっぽう兪氏『校注』のほうは、これとは逆に、五臣注の意見を「大誤無きに似たり」として賛意をしめし、「答客」「指事」とも、『文選』の設論ジャンルに相当する文章であるという（じっさい「答客難」「解嘲」は、設論ジャンルの作として採録されている）。したがって、「答客指事」は「答客」「指事」の二ジャンルにわけず、四字で一ジャンル名とかんがえるべきだと主張するのである。

いっぽう、「三言」と「八字」については、文字づらから三言詩や八言詩を連想させよう。だが、詩ジャンルはさきに言及済みなので、ここは文章作品でなければならない。では、どうした文章をさすのか。駱鴻凱『文選学』（一四頁 華正書局）は、『文章縁起』にいう離合体の文（遊戯的な作）がそれだと主張するが、これも一案にすぎず、けっきよくはよくわからない。

さらに問題なのは、「答客」「指事」「三言」「八字」などの実体がなんであるにせよ、これらのジャンルが『文選』中に存在しないということだ。右に列挙された諸ジャンルのなかで、『文選』に存在せぬものとしては、こ

の「答客」「指事」などのほかに、戒・誥・記・誓・符・悲・篇・引・碣があげられる。かく『文選』にふくまれぬジャンルであるにもかかわらず、なぜ「文選序」中で言及されているのか、蕭統の真意もまた、はかりがたいとせねばならない。

○譬「陶匏異器、並為入耳之娛、作者之致、蓋云備矣。」  
「黼黻不同、俱為悦目之玩。」

これらの諸ジャンルは、たとえれば、埙と笙はちがう楽器だが、ともに耳にこちよく、また黼と黻とはことなった模様だが、ともに目をたのしませることに、なぞらえることができる。作者がかたらんとする趣旨は、これらによって表現できるようになった。

この部分は、上述の諸ジャンルは、ともに娯樂ふうな性格を有していると、かたった部分である。五臣注は「言うところは、音声と彩色は異なると雖も、耳目の<sup>もてあそ</sup>翫びたるは<sup>こと</sup>殊ならず」と説明している。ここで蕭統が、各様の文学作品を、政治や教化に役だつものなどといわず、「耳にこちよく」「目をたのしませる」ものだと、かたっているのに注意しよう。つまり彼は、文学を娯樂的なものと主張しているのだ。こうした発言は、蕭統や当時の文学観を的確に表現したものといえ、記憶されておいてよい。

ここまでは、文学が発展してきた経緯を、ジャンルべつに叙した第二段である。賦の叙述からはじまり、騷、詩、頌とつづき、その他のジャンルにおよんでいる。こうした、『詩経』や六義と関連したジャンルを優先する並べかたは、伝統的な儒教的文学観にそったものだといってよい。それに対し、おわりの楽器や模様による比喩は、文学の娯樂的性格を重視したもので、儒教の「文学は政治や教化に役だつべし」という文学観にそむく、反伝統的なものだというべきだろう。だが私見によれば、蕭統当時では、こうした文学を娯樂ふうにみなす考えか

たが、むしろ主流だったのではあるまいか。もしそうだとすれば、この部分も、とくに伝統をやぶる革新的な文学観というほどのものではなく、当時の常識的な考えかたを、率直に表明したものといえるだろう。

### 第三段

ここで、ようやく『文選』の編集方針についての説明がなされる。序文中でもっとも重要な部分だといえよう。まずはじめは、『文選』を編集するにいたった、個人的な事情からのべはじめめる。

○余監撫余閑、居多暇日、歴観文囿、未嘗不心遊目想、移晷忘倦。

「泛覽辞林、

私は監国撫軍のあいま、余暇がおおかったので、詩文の苑にわけいり、ことばの林にいりびたつた。そして、心は文学の世界にあそび、目は詩文の内容をおもいうかべ、日がかたむいても、あきることがなかった。

蕭統が、自分の好文ぶりをかたつた部分である。はじめ二句で、蕭統は「私は監撫のあいま、余暇がおおかつた」といっている（「監撫」は「監国撫軍」の略で、皇太子の任務を意味する語である）。これをそのまま理解すると、蕭統は当時、ひまな日々をすごしていたことになる。蕭統は、ほんとうにひまだったから、文学に耽溺したのだろうか。それとも謙遜して、こういっているだけなのだろうか。『文選』編纂時期の問題や、父武帝との葛藤との関わりなどもからんで、なかなか微妙なところだろう。

ただ、『梁書』本伝の記述からすると、蕭統の文学好きは筋金いりだったようであり、かりに監国撫軍で多忙

だったとしても、文学趣味をわすれてしまうとはかんがえにくい。くわえて「多暇日」の語は、蕭統以外の詩文でも慣用的につかわれており（謝莊「月賦」でも、「陳王初喪王劉、端憂多暇。緑苔生閣、芳塵凝榭」などある）、やはり文字どおりの意では理解しないほうがよい。すると、このひまだったので文学に耽溺したという言葉いかたは、慣用的表現にしたがったものにすぎず、じっさいは謙遜の意を寓した行文だと理解すべきだろう。

また、後半の「歴観」云々の語句に対して、五臣注は「歴観泛覧は、徧く文章の林園を渉るを言うなり。心遊目想は、之を慕うこと深きを謂うなり。晷は日影なり。日側きても其の倦むを知らざるを言う」と注している。ここで問題になるのが、「心遊目想」（心に遊び目に想う）の解釈である。この句への注目すべき解釈として、王力氏の主編による『古代漢語』（中華書局）のものがある。すなわち、同書によれば、この句はほんらい「目遊心想」（目に遊び心に想う）とあるべきだったが、平仄をあわせるために、語順を意図的に

●●●  
目遊●●●  
●●●  
目●●●  
●●●  
心に遊び心に想う

←  
●●●  
心遊●●●  
●●●  
目●●●  
●●●  
心に遊び目に想う

と転倒したものだという（訳書『中国古典読法通論』三四五頁 朋友書店）。

この議論、「心遊目想」の語順にかえても、とくに平仄が改善されたとはおもえないのだが、解釈的には納得できる説である。たしかに、「心遊目想」（心に遊び目に想う）の語順にしてしまうと、字のくみあわせ、とくに後半の「目」と「想」のくみあわせ（目に想う）が奇妙で、解釈しにくい。その意味で、同書がいうように、「目遊心想」の語順にもどして理解したほうが、わかりやすいだろう（目で字句をおい、心で内容を想像する、の意）。

だが、この「目想」の語、たしかに奇妙なくみあわせではあるが、用例がないわけではない。たとえば『文選』所収の潘岳「寡婦賦」に、

窈冥兮潜翳、心存兮目想。

わが夫は冥土にかくれましたが、私の心中には「夫の姿が」きちんと存在し、まぶたにおもいうかびます。とみえている。このばあい「目想」は、「目でおもう」や「目がおもう」ではなく、「まぶたに想起する」の意であろう。しかも李善は、この語の先行事例として、曹操「祭橋玄文」の「幽霊潜翳、心存目想」という語句をひいており（『弟子注』も曹操の用例をひく。ただしこの曹操の二句は、嚴可均『全三国文』には未収）、どうやら「目想」の語は、当時それなりに使用されていたようだ。なかでも、潘岳「寡婦賦」のほうは、『文選』にも採録される名作なので、蕭統がこの句をしらなかつたとはかんがえにくい。するとこの「心遊目想」句は、平仄のために「目遊心想」を倒置したのではなく（そもそも「文選序」の文章は、原文に付した○●で推察されるように、平仄の諧和には熱心でない）、曹操や潘岳の用例を意識した字句であり、このままでよいとかんがえるべきだろう。

○自姫漢以来、眇焉悠邈、  
「時更七代、詞人才子、則名溢於縹囊。」

「数逾千祀、飛文染翰、則卷盈乎細帙。」

自非「略其蕪穢、蓋欲兼功、太半難矣。」

「集其清英。」

周や漢よりこのかた、はるかに時がへだたり、王朝は七代もかわり、千年以上の歳月がすぎさった。その間にあらわれた詩人や才子は、その名が書物にあふれ、彼らがつくった名篇や佳什は、書帙のなかに充満



している。蕪雜な作をとりのぞき、精鋭な作をあつめぬかぎりは、いくら努力しても、その大要に通じることはむつかしい。

ここで、蕭統自身の話柄から一般論にうつり、周漢からこのかた、おおくの文人があらわれ、詩文がかかれて、汗牛充棟となっている。そのため、あまたあるなかから名作をよりわけらる必要がある——という。つまり蕭統は、名篇を精選する必要性を主張しているわけだが、これはとうぜん『文選』を撰するさいに、名作をえらびだしたことをさしていよう。

この部分では、おわりのほうの「蓋欲兼功」句の意がとりにくい。五臣注に「文章の多くして、若し悪を去り善を留めざらば、其の功を倍加せんと欲すると雖も、大半は亦た遍覧する能わず。安くんぞ能く尽くせんや」とあるのは、「蓋欲兼功」を「倍の成果を手にいれようとしても」の意に解しているようだ。すると五臣注は、おそらく『孟子』公孫丑上の「事半古之人、功必倍之」（仕事は古人の半分でも、効果はきつとその倍だろう、の意）をふまえるとかんがえたのだろうが、やや通じにくい。それに対し『弟子注』のほうは、「功」を「攻」（おさめる↓努力する）の意に解する案を提示している。こちらのほうが意味がとりやすいので、ここでは『弟子注』の説にしたがって、右のように訳しておいた。

○若夫「姫公之籍、与「日月俱懸」、孝敬之准式、豈可「重以芟夷」、孔父之書、鬼神争奥、人倫之師友」、加之翦截。

さて、周公の古籍や孔子の書物たるや、日月とならび完全で、鬼神と奥深さをあらそう存在であり、孝敬の範式となり、人倫の手本となすべきものである。されば、どうしてこれらの書に取捨の手をくわえたり、一部をきりとったり「して『文選』に採録」できようか。

ここから、いよいよ『文選』編集にあたっての、具体的な選録方針を説明してゆく。この部分では、経書に対する方針をかたっている。「日月俱懸」は、揚雄「答劉歆書」の「張」伯松曰、是懸諸日月、不刊之書也（張伯松はいう、「これは日月とならんで天にかかり、完全な書である」と、の意）にもとづき、経書は日月とならんで完全な存在である、の意だろう。また「鬼神争奥」は、『易経』乾文言の「大人者……与鬼神合其吉凶」（大人なるものは、神霊と吉凶をおなじくするほどの能力をもっている、の意）にもとづく。この「鬼神」は、「日月」と対応しているので、幽霊ではなく、人間ばなれした能力をもつ神霊の意だと、理解せねばならない。これらをふまえ、はじめ四句は要するに、「周孔の書たるや、明るきは日月に並び、深きは鬼神の如きを言う」（五臣注）の意だろう。また「孝敬」云々の対偶は、「毛詩序」の「故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗」（だから得失をただし、天地をうごかし、鬼神を感ぜしめるには、詩以上のものはありえない。先王はこの詩によって夫婦をなごませ、孝行や敬意をつくさせ、人倫をまもり、教化に服させ、風俗をよきほうにあらためたのだ、の意）をふまえ、また「芟夷」「翦截」は、孔安国「尚書序」の「芟夷煩乱、翦截浮辞」（煩雑な箇所をきりとり、事実にそむくものをけずった、の意）を意識している（いづれも『文選』巻四十五におさめる）。この部分、経書について、取捨することなどできぬ超越した書であり、したがって『文選』中には採録しない——といているのだが、そう叙する行文じたいも、経書やその注の字句を斟酌しているのは、おそらく蕭統の意識したものだろう。

○老莊之作、蓋以立意為宗、今之所撰、又以略諸。  
管孟之流、不以能文為本、

『老子』『莊子』の作や『管子』『孟子』の書は、思想をのべることを旨としていて、文飾をほどこすこと

を主眼にしていない。それゆえ今回の選録からは、除外することとした。

つづいて、子類（思想）に属する書への採録方針を説明する。蕭統は、これらの書は「立意」（思想をのべる）を主とし、「能文」（文飾をほどこす）に意をはらっていない。だから、『文選』には採録しなかった——という。ここでいう「能文」の重視こそは、『文選』編集の重要なポイントだといってよい。編集方針の記述はなおもつづく。

○若「賢人之美辞、謀夫之話、氷積泉涌、所謂坐狙丘、仲連之却秦軍、忠臣之抗直、弁士之端、金相玉振、議稷下、食其之下齐国、留侯之發八難、蓋乃事美一時、概見墳籍、曲逆之吐六奇、語流千載、旁出子史、若斯之流、又亦繁博、雖伝之簡牘、而事異篇章。今之所集、亦所不取。

賢人のりっぱな言辞や忠臣の率直な諫言、あるいは策謀の士の善言、弁舌の士の口上、これらは、氷がとけ泉がわくようにながれで、また黄金のごとく内実を有し玉のごとくなりひびいた。たとえば、遊説の士が齊の狙丘に坐し、稷下で議論したこと、魯仲連が秦軍を退却させたこと、酈食其が齊国をくだしたこと、張良が八難をとなくて戦国諸侯の復活を阻止したこと、陳平が六度も奇計を案出して功をあげたこと——これらの話柄は当時もてはやされ、そのことばも千載のちにつたえられ、またその概略が書籍にしろされ、諸子や歴史の書にもみえている。だが、これらの文辞は煩雑で範囲がひろいし、書物に記述はされるものの、その実体は文学とはことなっている。だから、この『文選』には採録しないことにした。

ここでは、遊説家や策士たちの弁論についても、『文選』には採録しなかったとのべる。その理由は「事異篇

章」、つまりその実体が文学とことなっているからだ、という。この部分にも、蕭統の文学観がよくしめされている。ここに使用された「篇章」の語こそ、思想的文章や実用的文学をふくまぬ、狭義の文学（いわば純文学とでもいえようか）をさすものだろう。蕭統はおのが『文選』に、この「篇章」を収録しようとしており、策士たちの弁論はこれとちがっている、と主張しているのである。

では、蕭統は策士たちの弁論のなにをとらえて、それが「篇章」とことなる、と断じたのだろうか。その理由は明示されぬが、弁論のたぐいは、書面の文学かどうかという点で、そもそも疑問がある。というのは、後代の人間には、かかれた文辞として提示されるので、書面の文であるのはまちがいないが、ほんらいは口頭でかたられたことばだったからだ。かく口頭でかたられたものである以上、必然的に「篇章」とことなっていて、「能文」でない可能性がおおきい。そうした点を目して、蕭統は「篇章と異なる」と断じたのではあるまいか。

では蕭統は、どうした作品を「篇章」、つまり文学だとかんがえているのか。その答えは、つぎの部分でなされる。

○至於「記事之史、所以」褒貶是非、方之篇翰、亦已不同。  
「繫年之書、紀別異同。」

事実を記述した史書、年ごとに叙した年代記の類は、よしあしを褒貶し、事からの異同を弁別するものである。これらを文学とくらべると、やはり同類のものとすることはできない。

ここは史書の記述も、文学とはことなる「だから採録しない」とのべている。この部分は、五臣注も指摘するように、杜預「春秋左氏伝序」の「記事者以事繫日、以日繫月、以月繫時、以時繫年。所以紀遠近、別同異也……」  
據旧例而發義、指行事以正褒貶」（事件を記録する史官は、事件を日のしたにかけ、日を月のしたにかけ、月を

四季のしたにかけ、四季を年のしたにかけた。こうして、年月の遠近をしるし、事件の異同を区別した……ふるい凡例によって意味をあきらかにし、行動をしめして褒貶を明確にした、(の意) という記述を、もとにしているのだろう。

○若其「讚論之綜緝辞采、」事出於沈思、故与夫篇什、雜而集之。  
「序述之錯比文華、」義歸乎翰藻。

ところが史書のなかの讚論は華麗な文辞をあつめ、序述は裝飾をまじえており、それらの文章たるや、内容がふかい思弁から出発し、その意味は華麗な文辞による表現に帰着している。さすれば、文学作品とならべて、これらの文章も採録してよからう。

史書の文は文学ではないが、史書のなかの讚論や序述の文だけは例外だという。蕭統の文学観が端的に表白された部分である。ただ、ここの「讚論」と「序述」がなにをさすかは、じゅうらいややあいまいだったようだ。これらは史書中の評論部分であり、具体的には『文選』卷四十九・五十におさめられる文章(ジャンルでいえば「史論」「史述賛」)をさす点ではうごかないが、それでも「讚」「論」「序」「述」のこまかな弁別となると、諸家で微妙にくいちがっている。私見によれば、讚(賛がふつう)と論とは、各紀伝の末尾におかれる評論ふう文章のことをいい、序は、複数の人物をあつかった雑伝(儒林列伝や文学列伝など)の冒頭におかれる、序文ふう文章をさしているのではないだろうか。また述は、『漢書』叙伝中におかれた「漢書述」のことだろう(拙稿「班固の漢書述について」〈中京大学文学部紀要〉第三一—一号)を参照)。

これらの文章は、史書ふうの叙事的行文ではなく、修辭をこらした(句の字数をととのえたり、押韻したり)文辞でつづられることがおおい。蕭統によれば、それらの文は、沈思と翰藻とをかねそなえているので、「篇什」

つまり文学作品の仲間としてよいのだという。すでに先学にも指摘されることだが、蕭統はここで、「篇章」や「篇翰」「篇什」の実体を説明している。それは、いわば「文学とはなにか」の問いに、回答をおこなったものといえよう。その回答が、「事出於沈思、義婦乎翰藻」二句、すなわち、「沈思」と「翰藻」を兼備した作品——これが蕭統のかんがえる「篇章」（篇翰、篇什）であり、理想の文学だったのだ。蕭統は、そうした諸作を彼の『文選』にあつめたのである。

ところで、ここで使用された語には、いかにも六朝らしい新語がおおい。まず「綜緝」「錯比」は、これ以前に用例がさがしにくく、蕭統がはじめてつかった語だと推定してよかろう。意味としては、五臣注が解説する「綜緝は猶お合綴のごときなり」「錯は雜え、比は次づなり」にしたがってよさそうだ。「辞采」「文華」も、前漢以前には用例がみあたらず、六朝になってから出現してきた語である。だがこれも、意味をとるうえでは、それほど問題はない。

解釈上で問題になるのは、つぎの「事出」云々の二句だろう。この二句、なかでも「沈思」「翰藻」の二語の解釈は、その包含する内実をめぐって、清朝の阮元以来、おおくの見解が簇出し、いわば聚訟の府だといっている。近代では朱自清「文選序事出於沈思義婦乎翰藻説」（『朱自清古典文学論文集』所収）がこの問題をとりあげ、日本でも小尾郊一「昭明太子の文選序」（『眞実と虚構——六朝文学』所収 汲古書院）や清水凱夫「昭明太子文選序の検討」（『新文選学』所収）が、各様の用例を吟味して、精細な考証をおこなわれている。これらの卓説にくわえ、ここで新知見を提出することなど、できようはずもないが、ただ一点だけ、蛇足をくわえておきたいことがある。それは、じゅうらいは二語の用例をべつべつに検していたようだが、最近の便利な電子文献によって、検索をかけてみると、

「卞蘭賛述太子賦并上賦表」 窃見所作典論及諸賦頌、逸句爛然。沈思泉涌、華藻雲浮。聽之忘味、奉讀無倦。

私が太子さま（曹丕）の「典論」や賦頌の作を拝読いたしますに、秀逸な語句がかがやいておられます。

ふかい思弁は泉のようにわき、華麗な文辞が雲のようにあつまっています。これらの文を耳できいては恍然となり、拝誦してはあきることがありません。

「陸雲寒蟬賦」 聊振思于翰藻。闡令問以長存。

思弁を華麗な文辞で表現し、名声をあげ永久にたもちました。

という、二語をそなえた用例がでてきたことだ。この二例、いずれも字に若干の出入りはあるものの、二語が「文選序」とおなじく、近接して使用されている（前者は俞氏『校注』も指摘）。これからすると、当時の人びとは「思」と「藻」とを、対語ふう理解していたようだ。

この二例のうちでは、前者の魏の卞蘭「賛述太子賦并上賦表」の用例が、とくに注目される。すなわち、対偶中で「沈思」と「華藻」が対ででてくること、内容が太子（魏の曹丕）にかかわること——を勘案したならば、「文選序」での使用法にちかいかいようにおもわれるからだ。蕭統が、皇太子という立場の類似から、しばしば自分を魏の曹丕になぞらえ、また彼に敬意をいただいていたことは、拙稿「曹丕の与呉質書について——六朝文学との関連——」（『中国中世文学研究』第二〇号）で強調しておいた。この「事出」二句をつづったときも、おそらく同様の感情を有していたことだろう。そうだとすれば、内容が曹丕にかかわり、しかもその俊英ぶりをほめたたえた作という点で（じっさいこの賦は、「極力称頌曹丕的才華和功德、頗多諛詞」と評されている。『中国文学家辞典 古代第一分冊』〈四川人民出版社 一九八〇〉一三六頁）、蕭統がこの卞蘭賦の用例を脳裏にうかべていた可能性は、かなりたかいのではないだろうか。さらに字句の相似にこだわったならば、引用した卞蘭賦中の「沈思泉涌」

の「泉涌」は、「文選序」でも「氷積泉涌」とつかわれ、おなじく卞蘭賦中の「聽之忘味、奉読無倦」は、「文選序」の「移晷忘倦」に類している。これも、蕭統が卞蘭の賦を意識していた傍証となるう。

もっとも、蕭統が卞蘭賦の用例を意識していたにせよ、していなかったにせよ、この二語は、ふかき思弁（沈思）と華麗な文辞（翰藻）の意に解して大過あるまい。それゆえ、「事出」二句については、従前の議論を精査された清水凱夫氏の結論、すなわち「その内容は深い思弁より出たもので、その意味は華麗な文辞による表現に帰着するものである」という解釈（『新文選学』二五〇頁）に、したがっておくことにしたい。右の訳も、清水氏の説を参照したものである。

○「遠自周室、都為三十卷、名曰文選云耳。」  
「迄于聖代、

凡次文之体、各以彙聚。詩賦体既不一、又以類分。類分之中、各以時代相次。

こうして、とおくは周代から梁の聖代にいたるまでの諸作を、すべて三十卷にまとめ、それを『文選』と名づけた。作品をならべるやりかたとしては、同ジャンルのものを一カ所にあつめた。ただし詩と賦のジャンルはひととおりでないので、さらに同類の作ごとにわけた。そして同類の作のなかでは、時代がはやい順にならべた。

最後に、『文選』の巻数や配列のしかたなどをのべている。なんでもない説明のようだが、ここで蕭統が選択した、ジャンルごとの編纂やジャンル内での時代順の配列などは、以後の選集の規範となった。その意味で、後代への影響力という点では、この編纂方針も無視できるものではない。